

20040

当院におけるエコーを用いた穿刺部合併症への対応

【目的】動脈カテーテル穿刺後の合併症として、仮性動脈瘤、動静脈短絡(AV-shunt)などが知られている。特に仮性動脈瘤は発見が遅れると、用手圧迫止血は困難をきたす事が多く、高度に腫脹した瘤により神経が圧迫され神経障害を起こす事がある。当院での合併症の発生率と止血率を調査した。【結果】当院では、上腕動脈(BA)、大腿動脈(FA) 穿刺後の翌日に、全例動脈エコー検査を施行し、合併症の有無を確認している。2009年1月から2013年4月において、橈骨動脈(RA)、BA、FAの穿刺数は10497件であった。そのうち、エコーにて合併症を確認できたのは、仮性動脈瘤29件(0.28%)、AV-Shunt 27件(0.26%)、仮性動脈瘤+AV-Shunt 1件(0.01%)であった。これらの合併症を認めた場合、そのままエコーガイド下圧迫止血を行っている。止血の成功率は、仮性動脈瘤100%(29件/29件)に対し、AV-shuntは18.5%(5件/27件)の低値にとどまっている。【結論】仮性動脈瘤に対してのエコーガイド下圧迫止血は良好な結果を得ているが、AV-Shuntに対しては、成功率が低い。AV-Shuntの予防策として2010年7月より穿刺時にエコーマーキング下穿刺を行っており、マーキング開始の前後で、AV-shuntの合併率が4.3%から1.8%に減少している(P<0.05)。エコーを用いて早期に合併症を発見し対処することは、患者の負担を軽減し日常生活への復帰を早められると考えられる。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号